

紫川

むらさきがわ

北九州市

紫川は北九州市の小倉南区から小倉北区へと流れる2級河川です。
流長は19.8Km、流域面積101.4Km²。小倉南区項吉の福智山山腹に源を発し、ほぼ北流して小倉北区の浅野と許斐町の境界で響灘へと注いでいます。
紫川というその美しい名前とはうらはらに、昭和の高度成長時代は汚れた川の代名詞でした。しかし今、紫川は生まれ変わろうとしています。
紫川をきれいに含み言葉にして、様々な活動が進んでいます。
北九州市のシンボルともいえる川だからこそ、新しい美しさを持った「紫川」になろうとしているのです。

陽外橋から北方、足立山方面に向かって



紫川という美しい名前には、多くの由来があります。

- ・上流の平尾台を古くは紫の生野とよび、反禅を染めるムラサキ草が自生していたことにちなむとする説。 [詳細クリック](#)
- ・川面に映る山々や花などの美しい景色からその名がつけられたとする説。 [詳細クリック](#)
- ・慶長の頃、小倉城主細川忠興が、かつての居城である丹後の宮津城近くを流れていた紫川の名をそのままつけたという説。
- ・漁師エビスと恋人との伝説にちなむという説。 [詳細クリック](#)

紫川周辺の地名の由来

紫川の上流から下流まで、
周辺の土地にはさまざまな名前が
つけられています。
その地名の由来を紹介しましょう。

合馬(おうま)

ここはむかし交通の要所でした。香春の方から来る道と、
到津の方からくる道とが、ここで一つになっていました。
政府の連絡に使われる駅馬が二つの道から来て、ここで落
ち合うので「合馬」と呼ばれるようになったということです。

徳光(とくみつ)

むかし、この村は合馬川、大滝川、大清水川の三つの流れ
が集まり、いつも水があふれ、常水(とこみず)村と言っ
ていましたが、のちに「徳光」の文字を使うようになった
ということです。

頂吉(かぐめよし)

むらさき川の水源の一つである「かぐめよし」という地
名は、むかし本村という谷川の中ほどに、岩の上に大巖(お
おいわ)が重なり、その岩と岩との中に小さな石をはさみ、
その大巖をかぐめたような形があることから「頂め石(か
ぐめいし)」という呼び名があったのです。それがいつ
からか「頂吉」という字になったと伝えられています。

河川紀行
Vol.7



城野(じょうの)

むかしは城野合の陣と言われ、この野には古い城の跡で
あったということから「城野」の名が生まれました。

南方(みなみがた)と北方(きたがた)

大むかし、むらさき川の上流のここには企救(きく)池と
言われる池が広がっていて、それがだんだん土砂で埋まり、
干潟を作り、人の住む陸地になったという説があります。
神功皇后の伝説では、ここは船原とも言われ、徳力の本を
とって船が作られていたということです。川上を南干潟、
川下を北干潟と二つに分けて呼ばれていましたが、それ
がのちになまって「南方」「北方」という字になったとい
うことです。

徳力(とくりき)

むかし、神功皇后(じんぐうこうごう)が船の木材をこ
の村でとったことから採木(とりき)と言われ、それが「徳
利木」と変わったと言われています。江戸時代になって「徳
力」の字に変わったということです。

小嵐山(こあらしやま)

この辺りのむらさき川を「桜川」とも言っていました。川に
沿って徳力(とくりき)山があり、この山が京都の嵐山の
美しい風景によく似ているというので、当時の藩主 細川
幽細(ほそかわゆうさい)公がつけたと言われています。

参考: せせら cecera 水辺に関するホームページ
紫江's 水環境館より

<http://www.qbiz.ne.jp/cecera/mizukkan/main.html>

紫川が私たちの生活と、どのように関わっ
ているのか。紫川の昔話しの他、紫川で現
在おこなっている河川整備の紹介など、む
らさき川の情報が満載です。

紫川にかかる橋

北九州市「紫川マイタウン・マイリバー整備事業」の中に、自然をテーマにした10本の橋の整備があります。紫川の「自然再生」のシンボルとしての大きな期待と共に、着々と整備が進められています。10本の橋だけでなく、紫川には、鱒淵ダム直下の「山の口橋」から最下流に架かる「紫川大橋」まで、支流を含めて主なものだけでも40を超える橋があります。その中には、風格のただよう「眼鏡橋」、その名の通り桜の季節には花の名所として知られる「桜橋」など、情景あふれた美しい橋があり、市民に親しまれているのです。

紫川橋

老朽化が進んだ紫川橋は、「旧通称・陸軍橋」「鉄の街・北九州」「ニュー・インダストリアル」をキーワードに、鉄の持つ豪快さだけでなく、柔らかさや繊細さなど鉄の多面性を活かしたアーチ橋として、平成10年に生まれ変わりました。

中島橋

浅野町愛宕線を貫通するために新設された橋です。川の上の何もな
い空間を走り抜ける自然の風をテーマにしています。機能性とアー
ト性を追求、遠くからでも見えるモニュメントが目印です。

豊後橋

豊後橋は、細川時代に架けられた最も古い木造の橋として時代の移ろいを静かにみつめてきました。昭和58年に再建、珍しい斜張橋として直線的でモダンな姿を誇っています。

ハーブを連想させる外観に加え、親柱には自然の中の音と調和する清らかな音色が響く仕掛けを行う予定があります。

※橋の名前をクリックすると
写真が表示されます。



紫川大橋

海に最も近い紫川大橋は、一日約4万台ものトラックや乗用車が通ります。その交通量の多さを考慮して、歩道を車道から切り離し、車道より高く設けています。歩きながら、目の前に広がる海の紺めと潮の香りを楽しめます。

室町大橋

明治時代の紫川で行われていた鵜飼いの漁り火をモチーフとして、橋の両サイドにガスの炎を配しています。高欄の波模様は、角度や歩く速度で表情が微妙に変化。心に何かを語りかけてくれる暖かい感じのする橋です。

常盤橋

寛永11年より12年に架設。古くから長崎街道の起点として賑わった常盤橋。その歴史は古く、参勤交代の通路にもなっていたほどで、文政9年江戸に上る途中小倉に一泊したシーボルトもこの橋を渡し、橋上からの眺めをスケッチしたといいます。こうした歴史などを考慮して、日本の優れた木橋工法を用いて昔懐かしい雰囲気表現しています。

勝山橋

現在の勝山橋は、小倉城の石垣へとつながる情緒豊かな「石の橋」として整備されました。広い石畳の歩道部分は、勝山公園の一部となっており、公園区域を使って、地元まちづくり団体によってオープンカフェなどが行われています。

鳴外橋

治水のため川幅が広げられるため、架け替えられた国外橋。橋のなかほどにブロンズ像「鴈」、橋のたもとには森国外の文学碑。そして紫川によみがえってきた鳥。この3つの要素を組み合わせ、水鳥(かもめ)をイメージしたモダンな橋です。

紫川1号管理橋

紫川の川沿いに整備される遊歩道をつなぐ散策の橋です。
神藏川が紫川に注ぎ込むこの位置から、真正面に見える小倉城
と市庁舎。小倉の昔と今を代表する建築物が、月明かりのもと
幻想的な情景を演出します。

中の橋

広い歩道に色鮮やかに咲く太陽の花「ひまわり」は北九州市の市花です。また、高欄は市を取り囲む山並をかたどるなど、北九州市を代表するシンボル性を持たせています。

参考:北九州市
紫川マイタウン・マイリバー整備事業
「自然再生のシンボル 紫川10橋」より

河川紀行
Vol. 7

河川紀行：発行／福岡県河川協会
<http://www.fukuoka-pref-kasen.jp/kasenkyokai>
info@fukuoka-pref-kasen.jp